

賀来千香子

JOSHIBI no.190



人生を彩る美とともに。

『ずっとあなたが好きだった』をはじめ、数々のテレビドラマや映画、舞台作品で、日本中を魅了してきた女優、賀来千香子さん。
華々しいキャリアを支えるものは、女子美で培ったものづくりの精神と、広い意味での美への探求心だと明かします。

Photo 土井文雄 Text 立古和智

私が絵を描くようになったのは、趣味で水彩画を描いていた祖父からの影響です。「一緒に月下美人」を写生したことを、今でもよく覚えています。着物をまとい俳句を嗜む粋な祖父からは、美しいものに向き合う喜びを学びました。とはいえ、画家になることを夢見て女子美の付属中学校へと進んだわけではありません。きっかけは近所に住んでいた在校生のお姉さんからの「家庭的でいい学校よ」という一言でした。両親も「中学から大学まで通して学べるなら安心よね」と大賛成。実際に入学してみると、聞いていた通りの雰囲気、勉強と部活動にのびのびと打ち込むことができました。付属高校に進んでデザインコースを選んだからは、課題の制作にも没頭したものです。時間を忘れ、徹夜で打ち込んでしまった

こともしばしば。モデルとしてスカウトされたのもこの頃で、短大への進学後、18歳のときに雑誌『JJ』でデビューを果たします。初めはボージキングのイロハもわからず、大御所フォトグラファーの方からずいぶん叱られたことも。それでもめげずに続けられたのは、フォトグラファーさん、メイクさん、スタイリストさんなど、大勢の人とひとつの作品を形にするプロセスに歓びを感じていたから。自分で表情や仕草を工夫できるようになると、この仕事がますます面白くなっていきました。女子美で学んだ色彩のことやフォルムに関する知識を生かせる仕事だったことも良かった。女優としての活動が主になった今でもモデルは大好きな仕事のひとつです。

制作にも熱中しました。学ぶ、想像する、創る。毎日がその連続で、課題に追われた日もありましたが、充実していました。モデル業と学業の両方に打ち込めたのは、私のことを気にかけて応援してくださった先生方のおかげです。今も心から感謝しています。

卒業後の進路には迷いましたが、テレビドラマ『白き牡丹に』のオーディションに合格したことをきっかけに、女優の道を歩み始めました。私にとって女優の仕事は、まさにワンチームのものづくり。プロデューサー、脚本家、ディレクター、その他すべてのスタッフたち。誰ひとり欠けても、素晴らしい作品は生み出せません。「冬彦さん現象」とも呼ばれる一大ブームを巻き起こしたテレビドラマ『ずっとあなたが好きだった』の現場もそのひとつです。この作

賀来千香子（かく・ちかこ）

女子美術短期大学造形科生活デザイン教室在学中にモデルデビュー。1982年テレビドラマ『白き牡丹に』で女優デビューすると、『ずっとあなたが好きだった』『男女七人夏物語』など話題作に出演。近年では『ヤメ検の女』シリーズで主演を務めた。2016年、主演舞台『しあわせの雨傘』が公開。NHK Eテレ「明日も晴れ！ 人生レシピ」で司会を務めるなど幅広く活躍。



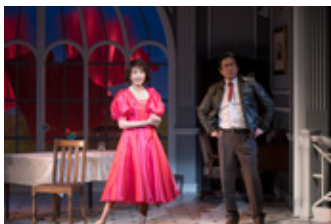
品は、制作陣の総合力も圧倒的でした。作品に関わるスタッフキャスト全員のベクトルがびったり噛み合った結果、ありがたいことに視聴者の心をつかみ、記録・記憶にも残る最高視聴率34.1%という大ヒットに繋がったのだと思っています。

これまで数々の作品で多くの役に出演させていただきましたが、ひとりの人間を造形するということは、とても奥深い仕事です。楽しくもあり、頭を悩ませることも多々あります。台本を読んでキャラクターのイメージがなかなかつかめないときは、不安に

なりますが「もし自分がこの人物だったらどうするだろう」と心から思いを巡らせていくと、いつの間にか不安も時間も忘れて集中しているんです。試行錯誤の過程には苦しみがつきものですが、それを超えた先には必ず達成感がある。これこそがものづくりの醍醐味ですよ。それに一度は「うまくできた」と思った仕事であったとしても、後から「ああすれば良かった」と後悔がつきまとうもの。お芝居や美術には100点はないから続け甲斐があるのでしょ（笑）。

今後の目標をひとつあげるとした

ら、「うまい女優」ではなくて、「いい女優」になること。技術力がともなうのはもちろんですが、演技に人間的な魅力や味がにじみ出ている女優です。だからこそ、私は女子美で学んだ「美」を生かしながら感性を磨き続け、人生を豊かに彩っていきたいと願っています。アート作品が持つ本物の美。ていねいな仕事が放つ美。情熱に宿る美。行動や心の美しさ。いろいろな美に触れながら、目の前のお仕事一つひとつに感謝して、ていねいなものづくり、自分づくりの努力を重ねていきたいと思っています。



主演舞台『しあわせの雨傘』
初演2016年(銀座 博品館劇場)
再演2018年(全国公演)



『あしたも晴れ! 人生レシピ』
NHK Eテレ
(毎週金曜20:00~放送中)



TBS日曜劇場
『グッドワイフ』

【創立120周年記念事業】FUTURE MYTHOLOGY DIARIES — 女子美術大学 × Cité internationale des arts フラボレーション20周年記念展 —

創立120周年記念事業の一環である、シテ・アンテルナショナル・デ・ザール(パリ)との交流20周年を記念する展覧会「FUTURE MYTHOLOGY DIARIES — 女子美術大学 × Cité internationale des arts 20周年記念展」が6月20日から7月13日までの期間、シテ・アンテルナショナル・デ・ザールのギャラリーで開催されました。出展者は女子美パリ賞歴代受賞者で、欧州在住



者8名が出品し、他地域在住者は作品上映による展示を行いました。学術交流協定大学のパリ・セルジー国立高等美術学校、ボンビドゥー・センターを始め現地のギャラリー関係者等も多く集まったオープニングレセプションでは、シテ・アンテルナショナル・デ・ザールのベネディクト・アリオリ理事長のご挨拶に始まり、終始賑やかな中で行われました。本学からは、理事長代理としてデザ



イン・工芸学科環境デザイン専攻教授横山勝樹顧問と、日本側ディレクターのアート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域教授日沼慎子先生が出席し、それぞれ謝辞を述べられました。2020年10月に、杉並キャンパスで同記念展を開催する予定です。女子美卒業生の国内外での活躍と女子美術大学の存在をフランスにてアピールする良い機会となりました。



特別招聘准教授

小松美羽先生 特別講義開催

本学短期大学部卒業生で、特別招聘准教授である現代アーティストの小松美羽先生をお招きした特別講義が杉並キャンパスで開催されました。まずは、4月に短期大学部2年生の「共通プログラム」として行われ、美術コース教授の山本雄三先生司会のもと、小松先生が「二生一緒に仕事をしたいと思える方」と評する通訳の星原恩さんとの対談形式で作家としての姿勢や仕事への取り組み方についてお話いただきました。星原さんは、何事にも「やってみよう」と向き合ってきた通訳の仕事の経験から「やってみたいことがなくても『やってみます』と言ってみてください」、小松先生は「仕事はやってみることがないことだらけ、闘志を燃やしてこなしてください」と学生にエールを送りました。

6月には短期大学部1年生に向けて「造形概論」として、小松先生と美術コース教授の山本先生、そして八木なぎさ先生の3名による講義が開講。小松先生がなぜ美術の道を選び、短期大学部へ進学したのかという理由や、作家としての現在の活動を紹介していただきました。講義後半では、アーティストにとって大事なポイントを9つ挙げ、中でも作品を積極的に発信していくことや、学校だけでなく外の世界にも興味を持ち、自ら進んで学びにいく姿勢の大切さについて触れ、「自分だけの感覚や個性を養い、自信を持って制作することが大事」と在学生に向けて想いを伝えました。講義の後には質疑応答の時間もあり、学生からの質問に丁寧に答えながらアドバイスをいただきました。



特別招聘教授 假屋崎省吾先生 特別講義開催

4月26日と5月24日に、本学の特別招聘教授である假屋崎省吾先生を杉並キャンパスにお迎えし、短期大学部2年生講義の「共通プログラム」として開催されました。国際的な舞台での華道のお仕事や、着物、ジュエリー、スカーフ、ガラス器、ファッション雑貨などのデザイン・プロデュースも手掛け、多岐にわたる活動をされている華道家の假屋崎先生。それぞれの講義のはじめには、季節の花材を使ったフラワーデモンストレーションも行われました。4月には黄色やピンクのシンピジウムの花とキバデマリの新緑を使い、華やかないけばなに。5月には旬の紫陽花と青々とした馬酔木（アセビ）を使ったコントラストが美しいフラワーデモンストレーションを実演。壇上で披露される假屋崎先生の巧みな手さばきに、いけばなが完成すると会場から

大きな拍手が湧き起こりました。いけばなを始めて今年で37年を迎えた假屋崎先生は、これまで携わられてきたお仕事や、ご自身の作品の写真をスクリーンに映してご紹介。その中のひとつ、2018年2月から3月にかけて日本橋三越本店で行われた『華道歴35周年 假屋崎省吾の世界展』には、本学在学学生も多数関わらせていただきました。実際に展覧会の作業の様子を当時を振り返りながら詳しくお話いただき、聴講する学生が興味深く見入る姿が印象的でした。假屋崎先生のユーモアあふれるお話や、学生たちに気さくに質問を投げかけコミュニケーションをとる様子は時間が経つのが早く感じてしまうほど楽しく、学生たちの制作活動の意欲に繋がる貴重な時間となりました。



客員教授 桑島十和子先生 特別講義開催

本学短期大学の客員教授であり美術監督として第一線で活躍されている桑島十和子先生の特別講義が杉並キャンパスで開催されました。短期大学部に在学中のある日、学内に掲示されていた「劇場公開映画の手伝い募集」のチラシを発見して、アルバイトとして制作現場で働きはじめた桑島先生。ひたすら仕事を見て覚える日々を過ごしながら、幼いころからの「話に沿って絵を描くことが好き」を実現、後の師匠との出会いにも繋がったそうです。また、美術監督の仕事をこれまでの作品のラフスケッチや画像をスクリーンに映しながらご紹介いただきました。真摯に目の前の仕事に取り組むことでできたさまざまな人との縁からキャラクターデザインや、舞台美術に携わる機会が生まれたお話に学生たちは興味津々な様子で聞き入っていました。その他、仕事を続ける上でのアドバイスも。絵を描き続ける上で、社会に出るとコミュニケーションが必須で、真面目に取り組んでいれば、必ずその姿を見ている人がいて、次の新たな仕事にもつながるとご自身のこれまでの振り返りながらお話いただきました。最後に桑島先生は、「自分がやってきたとどことなく面白いことも無駄ではない。色んなことに興味を持って取り組んでほしい」と学生にエールを送りました。講義後も学生たちからの質問が殺到し、桑島先生にご持参いただいたラフスケッチやこれまで携わられた作品の資料の数々を熱心に見る学生たちの姿が印象的でした。



特別招聘教授 館鼻則孝先生 講演会「世界で羽ばたく日本のアイデンティティ」

7月13日、本学特別招聘教授であり、日本の伝統文化を現代の表現へと、常に躍進を続けるアーティスト館鼻則孝先生による講演会が開催されました。オープンキャンパスと同時開催だったこともあり、芸術学部デザイン・工芸学科工芸専攻の在学生をはじめ、一般の方も多く聴講する講演会で、テーマは「世界で羽ばたく日本のアイデンティティ」。館鼻先生の制作のルーツとなったシュタイナー教育に基づくお母様手作りのワールドルフ



人形の思い出や、大学の卒業制作であるヒールレスシューズが、世界的アーティストであるレディー・ガガの目に留まるまでのエピソードに、聴講者は真剣な眼差しで聞き入っていました。また、フランスにあるカルティエ現代美術財団での、300年以上の歴史を誇る重要無形文化財「文楽」とのコラボレーションの紹介と、その公演の映像も上映。古典のストーリーに新たに演出をつけ、舞台美術も館鼻先生のアトリエでの制作物と工芸士



との共作による衣装や小道具を用いて、現代アートが日本の伝統芸能に新たな魅力を与えていることが伝わりました。講演会の後半では、全身の骨格を彫刻として現代の3D技術で創作する作品など、現在取り組んでいる活動や、世界を舞台に活躍するため、作家として最も大切なことについてのアドバイスをしていたとき、熱心にメモを取る学生の姿が印象的でした。



し館鼻先生のこれまでの実体験をもとに、丁寧にお話いただきました。そして、講演会の最後には、ヒールレスシューズの試着ができる機会が設けられ、貴重な体験に長蛇の列となりました。実際に歩いてみた学生からは「見た目よりずっと安定感があり、履きやすい」と履き心地に驚きと感動の声も。世界で活躍する館鼻先生の現在までの創作活動や、実際に作品に触れられる機会もあり、大変有意義な講演会となりました。



仲條正義客員教授×奥村靱正客員教授 特別講義開催

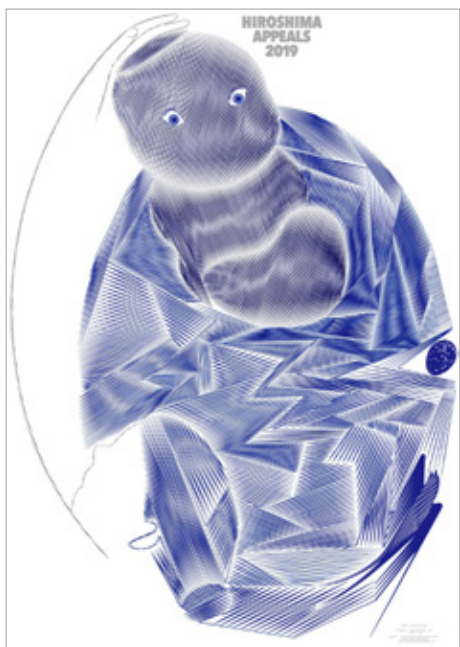
10月26日に相模原キャンパスにて芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻客員教授の仲條正義先生と奥村靱正先生による特別講義が開催されました。本講義に参加する学生はテーマに沿った課題を制作し、最終講評として仲條先生と奥村先生に講評をいただきます。今年のテーマは「男と女」。芸術学部の学生8名と大学院生3名の計11名がこのテーマに挑みました。会場には平面、半立体、映像などさまざまな作品が集結。中間



講評から変化した作品に、先生方からは「ぐつと良くなった」という声もあり、さらに良い作品にするためのアドバイスをする場面も。学生たちがテーマをどのように解釈し、作品に表現したのかを聞きながらそれぞれの作品を講評。先生方からは「それぞれテーマを多角的にとらえ、自由な発想で制作していた」と総評をいただき、最後は仲條賞3作品、奥村賞1作品が発表され、たくさんの聴講者が見守るなか特別講義は幕を下ろしました。

澁谷克彦教授が手掛ける「ヒロシマアピールズ」ポスターを発表、松井一実広島市長へ贈呈されました

核兵器廃絶と世界恒久平和を訴える「ヒロシマ・アピールズ」今年度のポスターを、本学芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻教授澁谷克彦先生が制作、7月18日にポスターの発表、広島市内でポスターの贈呈式・基調講演・レセプション等が行われました。ポスターは平和記念資料館（原爆資料館）、国際会議場、図書館などの広島市の施設、広島市内の市立中学校・高校や平和首長会議国内加盟都市会議総会で配付・販売。現在はJAGDA Online Shop (<https://shop.jagda.org/>)からお買い求めいただけます。



10月25日から27日、女子美祭が開催されました。相模原キャンパスは「あたし元年」、杉並キャンパスでは「とんとくる」をテーマに在学生の作品展示をはじめ、自主展示、ステージ発表、ワークショップや有志の学生による模擬店で賑わいました。また、卒業生が手がけたキャラクターが多く描かれているサンリオカフェワゴンによる軽食の販売を実施。恒例のゲスト講演会では相模原キャンパスに俳優の小澤廉さん、声優の小野坂昌也さん、小西克幸さんが来校、杉並キャンパスには、デーモン閣下さん、ハリー杉山さんによるトークショーが開かれました。最終日、相模原キャンパスでは、今年も学友会による打ち上げ花火が行われ、色鮮やかな花火が夜空を彩りました。

女子美祭 2019



女子美のアートイベント 「じょしりき【女子力】」展が開催！

9月6日から8日までの3日間、デザインフェスタギャラリー原宿の全館を貸し切り「じょしりき【女子力】」展が行われました。このイベントは、「群れない・違いを認め合う・自由な・力強い・流行に流されない」をテーマに、杉並キャンパスと相模原キャンパスの両校地の学生が挙に集うアートイベントです。

今年で3回目となる本イベントは出展する学生が大幅に増え、約300の団体が参加。過去最多の参加人数となりました。イベントでは油絵や日本画などの絵画や、模型やフェルトの立体作品の展示、オリジナルのイラストやアクセサリーなどが販売。また、今年は全館貸し切りならではのイベントとして着ぐるみによるパフォーマンスのほか、ギャラリーのカフェスペースを利用したマンドリンクラブによるマンドリンの生演奏が披露され、美しい音色がギャラリーに響き渡りました。演奏後には、カフェを利用していただくから盛大な拍手をいただきました。会期前から注目されていた本イベントは、9月5日にラジオ放送J-WAVE 81.3FMの「GOOD NEIGHBORS」の番組で取り上げられたこともあり、会期中は例年以上に反響がありました。ギャラリー入口に設置された華やかな垂れ幕を目印に訪れる方や、海外からの旅行者などが多く来場。各出展ブースでは、学生が来場された方々に作品の紹介や解説を行い、自分自身が制作した作品のコメントを直接聞くことができる貴重な機会となり、今後の制作活動の活力となりました。



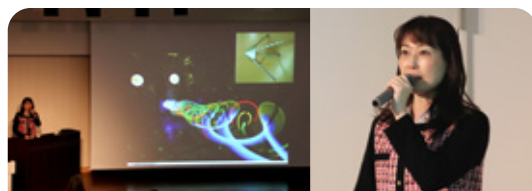
特別公開講座 宇宙・人間・アート

芸術学部アート・デザイン表現学科では、広い視野でアートを考えていくことのできる人材育成を行う一環として、各界の第一線で活躍されている先生方を講師にお迎えし、一般の方も聴講可能な特別公開講座として「宇宙・人間・アート」の授業を開講しています。



イルカ客員教授
「生物多様性」

シンガーソングライターで本学客員教授のイルカ先生をお迎えした特別公開講座が行われました。本学の短期大学卒業後にはシンガーソングライターのほか、絵本作家や着物作家、IUCN（国際自然保護連合）の親善大使を務めるなど、幅広く活躍されているイルカ先生。今回の講座では「生物多様性」をテーマに、ご自身が作詞、作曲されたIUCNの歌「We Love You Planet！〜ひびけ！惑星に。」の紹介や、絵本『まあるいいのち』を朗読されました。着物の制作においても「生物多様性」に着目し、絶滅危惧種の動物等を入れてデザインし、手描き。完成した着物をIUCNの会議や、「澄和Futurist賞」の授賞式で着用した様子をご紹介いただきました。2019年には「東京2020パラリンピックの成功とバリアフリー推進に向けた懇談会」メンバーの「パラ応援大使」に就任されたこともお話ししました。



山崎直子客員教授
「宇宙」と「アート」

宇宙飛行士であり本学客員教授の山崎直子先生をお招きし、「宇宙」と「アート」をテーマにお話しいただきました。講座のはじめには、山崎先生が実際に宇宙で体験した出来事や無重力時の過ごし方について写真とともにご紹介。また、国際宇宙ステーション「きぼう」で行われた日本独自の芸術表現実験についても触れ、光るコマを回し無重力空間に放ち光の軌跡から動きを見る実験など、宇宙でのアートの力や可能性についてお話しいただきました。質疑応答では学生からの宇宙に関する質問に対し、山崎先生はご自身の体験談を交えて回答。講座の最後には、山崎先生から「世界は新しい可能性に満ちていて、その可能性をつくっていくものがアートだと思います。皆さんも可能性を胸にこれから大学生活を送り、そして人生を歩んでいってほしい」と学生に語りかけました。



マーラ・セルベット客員教授
「ヒューマン・デザイン」

本学の客員教授であり、建築家、デザイナーとして国際的に活躍されているマーラ・セルベット先生による特別講演会が杉並キャンパスで行われました。イタリア・ミラノにあるセルベット先生のデザイン事務所（Migliore+Servetto建築事務所）は、建築、プロダクト・インテリア、コミュニケーション・デザインなど幅広い分野で業績をあげ、著名な国際コンペの最優秀賞を多数受賞している事務所です。今回の講演のテーマは「ヒューマン・デザイン」です。人間の行動様式を分析してヴィジュアルに数々の美しい空間構成を行っています。2019年のイタリア家具サロンに出品したインスタレーション、ミラノ王宮美術館で開催された「レオナルド・ダ・ヴィンチ展」、ミラノ・スカラ座の空間再構築などのプロジェクトを3次元の空間に置き換えて映像で見ることができました。それぞれのお仕事について詳しく解説され、真剣な眼差しで聴講する学生たちの姿が印象的でした。



いせひでこ客員教授
「木を友だちだと思ったこと、ありますか」

本学客員教授であり絵本作家のいせひでこ先生の講座では、「木を友だちだと思ったこと、ありますか」をテーマにお話しいただきました。自ら取材に赴き、実際にスケッチをすることを大切にしているいせ先生。先生の作品には木や植物が多く登場しますが、ご自身でも実際に植物を育て、成長過程を観察することで自然から学び、制作につながることもあると紹介されました。いせ先生の作品『最初の質問』では、詩人の長田弘さんの一つひとつの詩と向き合い、詩の世界観を壊さず、さらに読者が想像力を膨らませられるような絵として表現する難しさについてお話しいただき、学生も熱心に耳を傾けていました。また、いせ先生から学生に向けて「インターネットが普及した現代ですが、自ら体験し獲得した記憶を大切に制作してください」というメッセージをいただきました。



萩尾望都客員教授
「冒険」と「可能性」

本学客員教授であり漫画家の萩尾望都先生をお招きし、「冒険」と「可能性」をテーマに講義が行われました。はじめに、萩尾先生の作品『ポーの一族』の原画が展示された大英博物館でのマンガ展「The Citi exhibition Manga」に触れつつ、日本の漫画文化の歴史を貴重な複製本を書画カメラで投影しながらお話しいただきました。その後、萩尾先生の作品『スター・レッド』や『メッシュ』をご紹介。制作当時を振り返り、作品の原動力となった出来事など、制作秘話に来場者は熱心に耳を傾けていました。時にユーモアを交えながら飛び出す、さまざまなお話に時間はあっという間に過ぎていき、講義最後には、萩尾先生が令和元年度文化功労者として顕彰されたことをサプライズでお祝いし、本学学生代表からと、50年来の萩尾先生のファンである聴講者の方から花束贈呈が行われました。



萩尾先生を囲んで福下理事長、小倉学長



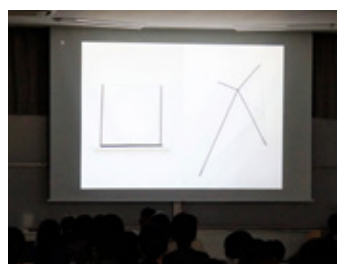
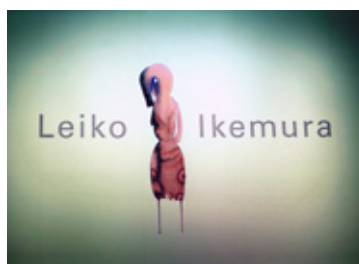
令和元年度文化功労者萩尾先生へ花束贈呈

客員教授イケムラレイコ先生 シュテファニー・シュタイン氏による特別講演会

は鑑賞者自らの体験であると話されていました。

また、グローバルに活動されているイケムラ先生は、1月から3月に国立新美術館で開催された日本での大規模な展覧会『イケムラレイコ 土と星 Our Planet』展に引き続き、巡回展として5月から9月までスイスのバーゼル美術館でも展覧会を開催されました。

イケムラ先生は、今の時代の日本や世界で起きているさまざまな環境問題や社会問題に、「女性」「作家」をキーにしつつ、「アーティストとしてどのように関わることができるのか、世代を超えて皆さんと一緒に考えていきたい」「ユーモアを込めて「柔らかな革命もできると思う」と話されていたことが印象的でした。アートは自分と正直に向き合い、価値観は自分自身で切り開いていくもの。最終的にどれだけ熱心に人と向き合えるか、捧げられるか、時間をかけて次世代に人間的な態度を示せるかなど、講演会でお二人が語られた言葉・想いはしっかりと学生たちに受け止められました。



10月8日大学院客員教授のイケムラレイコ先生と外国ゲスト講師でアーティストのシュテファニー・シュタイン(Stephanie Stein)氏による特別講演会が相模原キャンパスで開催されました。今回の特別講演会は洋画研究室主催によるもので、大学院洋画研究領域の大学院生と、芸術学部美術学科洋画専攻の3年生を中心に、多くの学生が聴講しました。

シュテファニー・シュタイン氏はドイツ生まれ。ベルリン在住のアーティストとして活動されており、ご自身の作品画像や映像を紹介しながら、レクチャーしていただきました。

講演会はシュテファニー氏、イケムラ先生お二人それぞれの作品の共通点や違い、コンセプトについて自由に意見を述べる形で進みました。

個人の経験を印象深く表現する方法とは対極の、シンプルを突き詰める作品について学生から質問を受け、シュテファニー氏は作品は余分なものを限界までそぎ落とす作業が「日本の俳句」に感覚的に似ているとコメント。作品をどのように感じるか

第9回 百年丹青縁展

— 中日国際交流書画展 上海交通大学・女子美術大学 —

本学と上海交通大学は2013年より、国際文化交流のさらなる発展を目指し中日芸術文化交流のプラットフォームとして芸術文化交流を頻繁に行っています。両大学で毎年開催している「第9回百年丹青縁展」が本学杉並キャンパスのギャラリーニケで開催されました。今回の交流展では、上海交通大学及び上海

交通大学海派文化研究所の先生方の中国画作品と芸術学部美術学科日本画専攻の教員の日本画作品が展示されました。なお、110周年記念ホールにて、今夏ニューヨークの日本クラブで展示を行った「地球の色—日本画と天然岩絵具」展も同時開催されました。また、展覧会の開催と合わせ、本学の学生を対象

とした中国画特別講習会を開催。詹仁左先生と同じく本学の特別招聘教授である吴平先生に「花鳥風月」と「山水画」のさまざまな技法の実演を交え、一人ひとり丁寧に指導いただきました。講習会の最後には、先生のお手本を参考にし、全員が素晴らしい中国画の作品を見事に完成させました。



Q 6

大学時代にやっておくべきことについて、アドバイスをお願いします。

学生時代は自分の勉強したいことを突き詰められる貴重な時間だと思います。それを見つけることは大変な作業だけでも、それを見つけて寝ることも食べることも忘れられるほど没頭することができれば、その後どんな困難があってもその道を自分で切り開いていけると思います。失敗を恐れずにいろいろなことに挑戦してください。社会に出る前に学校という守られた環境の中でなら、それを繰り返し成長できるはずです。失敗なしでは学べないことは沢山あります。自己の作品制作だけでなく、自分の勉強している分野では実際どんなことが起きているのかにも興味を持ち、大学外での活動にも積極的に参加していろいろな人と出会う機会を持つべきです。

Q 7

海外で制作・仕事をするための“楽しさ”を教えてください。

日本もグローバル化が進んでいるのでそんなに違いはないかもしれませんが、いろいろな宗教、文化で育った人達とお互いの価値観を尊重しあいながら仕事をするのが、緊張感があって楽しいです。特に自分が日本で育った中で培われた常識みたいなものが通用しなかったりすると、それをクリティカルに考え直したり見つけ直したりする機会をもらえ、さまざまな状況に対して柔軟に対応できるようになりました。それと同時に日本で育ったというバックグラウンドが自分の個性の一部として存在しているということに気付かされます。

Q 8

やりたいことや夢を実現するためのヒントを教えてください。

チャンスが巡って来たときに、それを掴むための準備を諦めずに常にして、世の中に発信しておくことです。チャンスはただ待っていてもなかなか来てくれません。来てくれても、自分の夢のための努力やそれに対する真面目な姿勢を見せる準備ができていなければ、そのチャンスを掴むことはできません。意志を持って勉強や作品作りをし、その姿を世に発信していれば誰かがどこかで見ていてくれます。

Q 9

後輩(女子美生)に一言メッセージをお願いします。

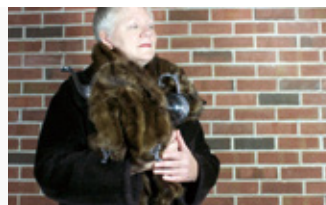
私は女子美でインテリアの勉強をし、ランドスケープデザインの仕事をし、ガラスアートに夢中になり、大嫌いだっただ英語の勉強をしてアメリカに渡り、メタルアートの勉強をして学位を取り、現在大学でアートを教える仕事をしながら作家活動をしています。大学を卒業した時はこんなこと想像もしていませんでした。経験した全てのことは私の個性となり、強みとなり、現在の私を作り上げてくれていると思います。学生時代は将来の自分のための準備期間で、卒業はゴールではなく、スタートであるということを忘れずにいてください。



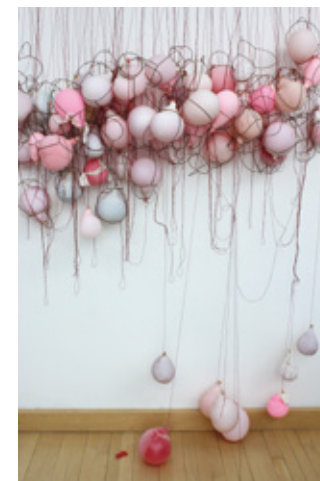
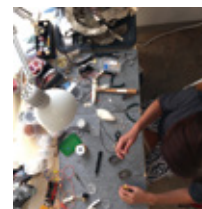
『Eruption Necklace』2007
プラスチックのぶどう、ウール、真鍮 145×18×10cm



左『Trepidation』2014 毛皮のコート、革のジャケット、銀メッキの皿とポット、木綿糸、麻布 43×38×10cm
右『My Dear』2015 毛皮のコート、銀メッキのコーヒーポット、木綿糸 127×30×17cm



『Memory Vessels #1, #2』2019 (ブローチ)
銀メッキのトレイ、銀、真鍮、パール、金糸、ステンレススチール
#1, 8×6×2cm / #2, 10×5×1cm



『The Way of Flesh #3』2012 (インスタレーション)
風船、ヘリウムガス、鉄、木綿糸 300×215×50cm



『Flow』2018 (ブローチ)
銀メッキのクリーマー、銀、パール、シルク糸、ステンレススチール 17×10×7cm

小野寺 和子

Q 1

なぜ海外で活動・仕事することを選んだのですか？

女子美の産業デザイン科を卒業し、何年か働いた後趣味でやっていたガラスアートを本格的に勉強したいと思いました。その時の私の年齢(30歳位)や経験では日本で大学に入り直すなどの新しく道を見つけるのが難しく、短期での勉強をと思い、アメリカにガラスのワークショップを受けに行きました。そこで色々な人との出会いがありアメリカでなら年齢に関係なく誰でも大学で勉強できることを知り、まずはアメリカのコミュニティーカレッジに入り英語やアートのクラスを受けました。その後いろいろな経験を経てガラスから進路を変更し、大学院でメタルアートの勉強をし、そのままアメリカの大学でアートの教職に就きました。

Q 2

女子美時代は、どんな学生でしたか？

私は親の勧めもありインテリアデザインを専攻していたのですが、あまり真面目な学生ではなかったように思います。図面を引いたり、模型を作ったりするのは楽しかったのですが、授業ではデザインしたものが実物になることがほとんどなかったので、早く就職して実際に物が出来上がるのを見たいなあ、などと、生意気なことを思っていました。卒業後デザイナーとして就職できたのですが結局その後、自分の手で物を作ることを極めたくてアートの道を目指すことになったわけなのです。

Q 3

女子美時代の印象深い思い出を教えてください。

大学の近辺に住んでいたクラスメートのアパートに泊まり込んで徹夜で課題の模型を仕上げたことが何度もありました。今となっては良い思い出です。クラスメートにはいろいろな助けてもらいました。それと、普段お世話になっているデザインの先生方の作品を実際見た時に、とても刺激になったのを覚えています。特に浴衣や型染めのプロセスなどに全く興味がなかったのですが、松崎笙子先生のかぶく浴衣の展覧会を見た時、その斬新さにとても惹かれたと同時に女子美生として誇りに思いました。

Q 4

美大の中でも、女子美を選んだのはなぜですか？

当時は産業デザイン科が杉並キャンパスにあり、東京中心部でデザインの勉強ができる、ということで女子美を選びました。

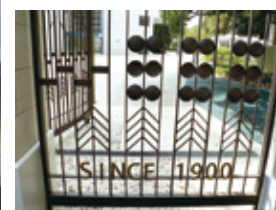
Q 5

制作・仕事をする上で大切にしている考え方を教えてください。

私は英語もろくにできずにアメリカに渡り、たくさんの人たちに助けられてここまでやってこれたという思いがあるので、当たり前のことかもしれませんが人との出会い、繋がり大切に、受けた恩を忘れないようにしています。作品制作に関しては、自分に嘘をつかず直感に正直でありつつ、新しいことにチャレンジすることを忘れずにいるように心がけています。新しいことにチャレンジすると新しい発見や失敗があり、自分を進化させることができると思うのです。

女子美術大学と伊勢丹相模原店の ファイナルアートプロジェクト開催

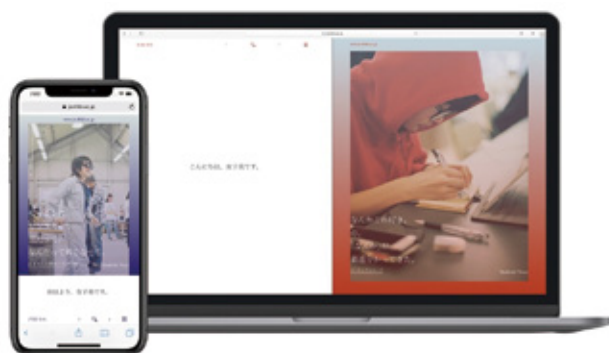
本学相模原キャンパスと伊勢丹相模原店は1990年に誕生した縁もあり、これまで数々のコラボレーションを実施してきました。今回は伊勢丹相模原店が閉店する9月30日までのファイナルアートプロジェクトを開催。「みんなで大きな木を完成させよう! Thank you so so much!」をテーマに、本学芸術学部美術学科立体アート専攻教授の平戸貢児先生と、学生デザインルームを中心に先生方や学生が協力し合い、木材で制作した高さ6mのモザイクアートの大きな木は、伊勢丹2階の正面玄関に設置されました。天井からつるした葉っぱや、モザイクアートに装飾した昆虫や動物がアクセントになり、可愛らしく、見ごたえのあるモニュメントが完成。ワークショップでは学生による万華鏡作りや、木材で動物や昆虫作りが行われ、訪れたたくさんの方々に参加し、賑わいあるプロジェクトとなりました。



相模原キャンパス 正門リニューアル

夏から改修を行ってありました相模原キャンパスの正門が完成いたしました。相模原キャンパスでは、教育・学生生活環境の充実と共に、美観の向上を図るため、中庭の改修、バスパースの改修、そして今回の正門リニューアルと2017年度から3ヵ年計画で改修を進めてきました。

NEWS — & — TOPICS



本学WEBサイト



むきだしの
彼女たちの記録

女子美公式 ウェブサイトリニューアル

7月、本学公式ウェブサイト(<https://www.joshibi.ac.jp>) がリニューアルいたしました。今回のリニューアルでは、受験を控えた方と保護者、学内外の方などさまざまな来訪者に向け、スマートフォンでの閲覧を想定したデザインを採用。また、スマートフォンではページ下部、PCでは画面右側に表示される「Students' Voice」では、さまざまな在学生たちの実際の姿、ことばを多く掲載するなど、他大学とは異なる本学の多彩

でエネルギーな魅力が伝わるサイトを目指し、設計が行われました。また在学生が、何を想い、何を生み出し、どんな未来を描いているのか、そのありのままの姿に迫ったインタビュー記事「むきだしの彼女たちの記録」(<https://www.joshibi.ac.jp/pages/interview/students>) などの新しいコンテンツも制作。今後ウェブサイトを通して、本学の最新情報をお届けします。



コラボレーションロゴタイプ
(デザイン: ヴィジュアルデザイン専攻3年 竹腰真希)

ART下水道

プロジェクトロゴタイプ
(デザイン: ヴィジュアルデザイン専攻3年 谷下美沙)

アート下水道 in 横浜 プロジェクト

「アート下水道 in 横浜 プロジェクト」は、本学芸術学部美術学科洋画専攻、同学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻と、下水道事業のコンサルタント会社である株式会社日水コンの共同プロジェクト。日水コン社員の方との意見交換等を通じ、下水処理のしくみや水循環について学びを深め、それをもとに絵画・インスタレーション・映像等の作品を

制作。8月にパシフィコ横浜で行われた「下水道展2019」の日水コンおよび横浜市のブースにて展示されました。

参加学生: 美術学科洋画専攻8名、美術学科日本画専攻1名、
デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻3名 計12名
担当教員: 美術学科洋画専攻: 大森悟、前川加奈
デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻: 澁谷克彦、片山尊奈



07

女子美×東工大コラボレーション企画 「東工大で女子美ピクニック♪」を開催



東京工業大学すずかけ台キャンパスのイベント「すずかけサイエンスデイ2019」にて、本学とのコラボレーション企画「東工大で女子美ピクニック♪」を5月に開催。今年で3度目となる本企画では、本学在学生30名以上が参加し、ギャラリートークやボディシールアートといった大人から子どもまで楽しめるイベントを実施しました。すずかけ台キャンパスの「ペリバトス・オープンギャラリー」ではギャラリートークを行い、展示作品の見どころを解説。また、ボディシールアートは、来場した子どもたちが選んだデザインをボディシールに描き、常時順番待ちが出るほどの人気コーナーとなりました。会場では、ボディシールアートで手や顔を彩った子どもたちが、校内の企画に参加している姿も多く見られ、終日大盛況のうちに終了しました。

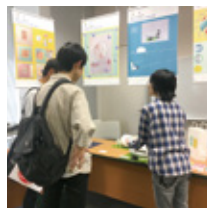


08

ニューヨーク日本クラブ企画展 「地球の色ー日本画と天然岩絵具」開催

「地球の色ー日本画と天然岩絵具」と題し、粉碎・分級の先端技術を用いた天然岩絵具の具研究をニューヨークの日本クラブのギャラリーにて6月20日から7月17日まで展示を行い約1,000人の方が来場されました。本学名誉教授の橋本弘安先生による、これまでの研究により作られた天然岩絵具を日本画・工芸のみならず幅広い分野の制作に展開し昨年はイギリスやドイツでも発表。オープニング・レセプション&講演会では「岩絵具について」橋本先生が講演、また、女子美で開発した天然岩絵具作成キットでワークショップを実施しました。本展示の一部は、10月に杉並キャンパスにて巡回展として開催されました。

出展者
日本画：橋本弘安名誉教授、岸野 香教授、宮島 弘道教授、村岡 貴美男教授、福田 亜紀子准教授
工芸：渡邊 三奈子教授、工藤 直教授、吉田 潤一郎教授、荒 姿寿准教授、大崎 綾子准教授
ヴィジュアルデザイン：能見 英子教授 プロダクト：松本 博子教授
研究協力：尾藤一泉特別招聘教授 大阪大学接合科学研究所 内藤牧男教授



05

女子美術大学と東京大学のコラボレーション企画 「サイエンス×アートプロジェクト2019」

「サイエンス×アートプロジェクト2019」は、本学芸術学部アート・デザイン表現学科の授業「プロジェクト&コラボレーション演習」で、東京大学情報理工学系研究科知能機械情報学専攻竹内昌治研究室の教員と学生が協力し、先端科学をアートで伝える作品を共同で生み出しました。この授業は、外部の企業や組織との企画立案と共同作業を通して、プロジェクト進行と実現を実践的に学ぶ演習授業で、今回は東京大学の難しい

科学を分かりやすく、絵本やアニメーション、グッズなど様々なコンテンツに展開しました。本学芸術学部アート・デザイン表現学科准教授である佐藤暁子先生が、本プロジェクトを担当し、同学科のメディア表現領域3年生と、ヒーリング表現領域3年生の学生が参加。8月7日には、東京大学本郷キャンパス内にて「高校生のための東京大学オープンキャンパス」で成果発表展示が行われ、500人以上の方にご来場いただきました。



06

長野県高山村の地域デザイン制作と 国立台湾芸術大学との交流

2017年より長野県高山村と台湾の新北市烏來区の地域づくり活動として、本学と学術交流協定を結んでいる国立台湾芸術大学との地域デザイン制作を行っています。今年は、両大学の大学院生、学部生、卒業生あわせて8名がプロジェクトに参加し、「高山村のてぬぐい、烏來区の紙袋」という課題を手がけています。10月には両大学の学生が高山村取材する予定でしたが、台風19号のため実現できず、東京で打ち合わせを実施。11月には台湾の新北市烏來区を訪問し、課題の中間報告を行いました。2020年1月下旬には、両大学の学長含め高山村での課題作品発表会を行う予定です。プロジェクト全体の様子は3回目の集大成として番組が制作され、台湾の民視無線台（FTV）で2月23日に、日本では3月に上映されます。



女子美×株式会社荏原製作所 産学共同プロジェクト



株式会社荏原製作所と本学芸術学部デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻では共同研究を進めており、3月22日に約10ヶ月間にわたる共同研究の成果発表会が、荏原製作所本社にて行われました。成果発表会では、荏原製作所の既存の施設見学、製品を使ったときに感じた課題・問題点を考察した上で、「安全性・使いやすさ・親しみやすさ」のさまざまな切り口で本学学生が考える新しいアイデアを提案。実際の社会で使用されている既存のサービス・商品に、自らのアイデア・新しい価値を付け加えることを実践的に経験する貴重な機会となりました。

指導教員：デザイン・工芸学科 プロダクトデザイン専攻 主任教授 松本博子

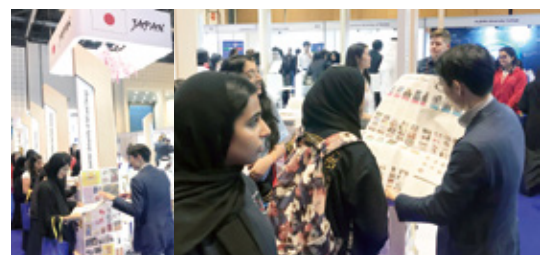


女子美×貝印株式会社 「刃ッカソンプロジェクト」



刃物をはじめ、調理器具・ビューティケア・医療用製品を開発・製造・販売している貝印株式会社と本学芸術学部デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻の共同研究成果発表会が3月26日に、貝印東京本社 2F kaihouse セミナールームで行われました。この共同研究は「刃ッカソンプロジェクト」というタイトルで、約9ヶ月間に渡って進められ、成果発表会ではプロダクトデザイン専攻3年生が3つの班に分かれ商品提案。貝印の社員の方々の投票により各賞が決定し、表彰では「刃ッカソンプロジェクト」の銘の入ったナイフが授与されるなど、参加学生にとっては貴重な経験、今後の励みになる研究発表会となりました。

指導教員：デザイン・工芸学科 プロダクトデザイン専攻 主任教授 松本博子



アラブ首長国連邦の アブダビ首長国で開催された 「NAJAH Exhibition 2019」に今年度も参加

10月30日から11月1日、アラブ首長国連邦 (UAE) のアブダビ首長国で毎年行われる進学フェア「NAJAH Abu Dhabi 2019」に、昨年度に続き、3度目の出展を行いました。本フェアには、日本をはじめとする、アメリカ、カナダ、フランス等の世界各国の高等教育機関が出展し、本学を含む6大学及び独立行政法人日本学生支援機構 (日本語学校) からなる日本パビリオンは、現地の高校生や大学生に対し、日本留学への動機付けや日本に対する理解の醸成を目指し、日本の文化や教育、研究の特徴や魅力について発信しました。参加大学の中で唯一の美術大学である本学の注目度は高く、日本のアニメーションや漫画、キャラクター、デザインに関心を持つ来場者で賑わいました。初めて本学を知った現地の高校生や大学生からは「サマー・スクールにぜひ参加したい」という声が数多く寄せられました。



短期大学部の有志学生による テキスタイルブランドが 「rooms EXPERIENCE 39」に出展

9月4日から6日の3日間、本学短期大学部造形学科デザインコース・テキスタイル2年生の有志によるテキスタイルブランド「-Impatiens- 二面性女子」が、日本最大級のファッションとデザインの祭典「rooms EXPERIENCE 39」に出展しました。ブースでは「女子美らしさ」をテーマに、1枚ずつ染め方や配色を工夫して作ったがま口や巾着等のテキスタイル製品を販売。巾着は上げた時に円形に広がり、ランチョンマットとしても使用できるような細工がされています。今しか感じることでできない学生たちの想いを、テキスタイルを通じて表現しました。

海外サマー・スクール2019開催

本学と学術交流協定を結んでいるイギリスのバーミンガム・シティ大学において8月9日から9月5日に海外サマー・スクールが開催され、大学院1名、芸術学部24名、短期大学部5名の計30名が参加しました。前半の2週間はゲームやアクティビティを取り入れた英語研修に加え、版画、フォトグラム、刺繍、石膏などの様々な素材に触れながら基礎テクニックや表現方法を学ぶ実技研修を実施。郊外研修ではテート・リヴァプールを訪れ、ポップアートシーンを代表するキース・ヘリング展を見学

しました。後半1週間はホームステイを経験しながらメジャープロジェクト制作を行い、最終日にはホストファミリーを迎えての展示会を開催しました。研修終盤ではロンドンを訪問し、世界遺産としても有名なウェストミンスター寺院や、エリザベス女王のバッキンガム宮殿等を見学しました。異国の環境の中で、新しいものごとにチャレンジした1ヶ月。異文化に触れ、現地の先生方やファミリーとの温かい交流を通し、たくさんの刺激を吸収できた貴重な体験となりました。



女子美×佐倉市との連携授業 「SAKURA×JOSHIBI」

本学と佐倉市では2012年より連携協働に関する協定を結んでいます。8月22日には、連携授業「SAKURA×JOSHIBI」ワークショップ「光る土偶仮面をつくろう!」をアート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域の学生7名が行いました。子どもたちにアートの世界の楽しさを伝えるこの取り組みは、「朝日小学生新聞」、「朝日中高生新聞」にも掲載されるなど、大きな注目を集めました。



南相馬市子ども文化芸術交流事業

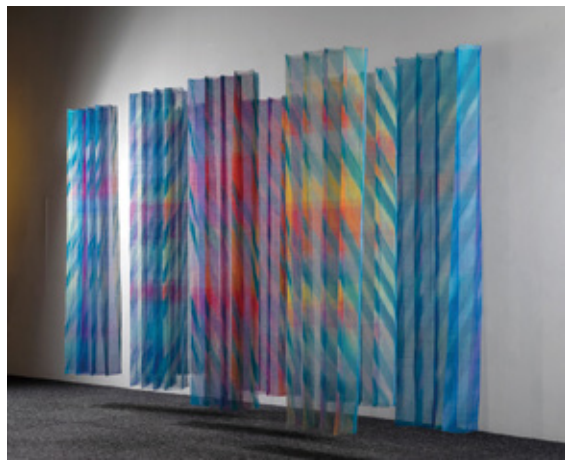
本学芸術学部アート・デザイン表現学科では、「南相馬市子ども文化芸術交流事業」を続けており、今年度も、8月7日から9日までアートプロデュース表現領域の学生10名によるワークショップが行われました。また、7月20日に南相馬市の北泉海水浴場の再開にあたり南相馬市からの依頼で、アートプロデュース表現領域の4年生4名が、「注意喚起看板」、「避難経路図看板」、「避難誘導看板」をデザインし、各看板は実際に海水浴場に設置されました。



注意喚起看板



避難誘導看板



渡邊三奈子教授 「第16回 国際タペストリー トリエンナーレ」にて入選

本学芸術学部デザイン・工芸学科工芸専攻教授の渡邊三奈子先生の作品が、ポーランドで開催される「第16回国際タペストリートリエンナーレ」にて展示されています。本展示会は、3年ごとにウッチ中央織物博物館が主催する世界で最も歴史あるテキスタイルアートの展示会です。今回のテーマは「Breaching Borders」。国境や文化などのさまざまな境界を超えた、一人ひとりのアイデンティティの意味を再定義する展示となっています。世界各国のさまざまなアーティストによる585の応募作品から選ばれたのは、わずか55作品。その中に渡邊先生の多層織と板締め絞りによる作品「水底（みなそこ）の音色」が選出されました。この作品は「水の惑星」と呼ばれる美しい地球が、国々との境界を超えて流れる海や河川で繋がっていることに着目し、光を吸収し現れる水中の色彩と、生物が共存する音やリズムを表現しています。なお本展示会は、2020年3月15日まで行われます。



福士朋子×北澤憲昭×櫻井拓 『絵画と時間と〜“お絵描き少女☆ ラッキーちゃん”をめぐって』が刊行

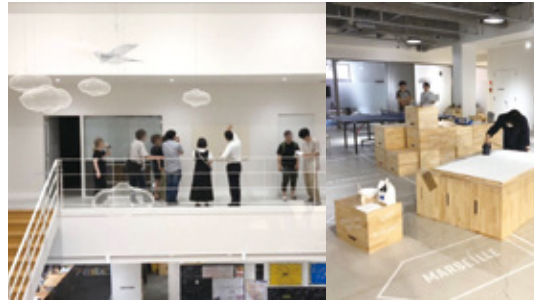
2015年に刊行された美術家が日常で出会う出来事や気付き、疑問や違和感をユーモラスに描いた4コママンガ『お絵描き少女☆ラッキーちゃん』。この本を出発点に、「絵画と時間」というテーマをめぐって、『ラッキーちゃん』の著者で本学芸術学部美術学科洋画専攻教授の福士朋子先生、本学名誉教授の北澤憲昭先生、編集者の櫻井拓氏が語り尽くした、福士朋子×北澤憲昭×櫻井拓『絵画と時間と“お絵描き少女☆ラッキーちゃん”をめぐって』が3月に女子美術大学出版助成、女子美術大学図書館による助成を受け、BLUE ARTより刊行されました。



21 | ファッションブランド「FRAPBOIS」

本学卒業生で作家の赤坂董さんがファッションブランド「FRAPBOIS」とコラボレーションした商品が発売されました。今回、猫と花のドローイングからオリジナルのテキスタイルを作成し、ブラウス・ワンピースとして制作され、ブラック・ブラウンの2色展開で販売されています。これらの商品は、「FRAPBOIS」店舗や通販でご購入いただくことが可能です。

商品名: パンジー (ブラウス・ワンピース)



20 | AIR in Hamee (アーティスト・イン・レジデンス) プロジェクトがスタート

本学芸術学部美術学科洋画専攻・Hamee株式会社・ホルペイン株式会社の産学連携として行われているプロジェクト「AIR in Hamee」。審査によって選抜された本学芸術学部絵画学科洋画専攻卒業生の音羽晴佳さんが1ヶ月に渡り、Hamee株式会社のオフィスで制作。最先端の商品を開発している会社とのコラボレーション、また制作期間中はオフィスがクリエイティブ空間に変化するソーシャル・イノベーションとして注目されました。



18 | 東京2020公認プログラム パラリンピック応援イベント 「弦の音と足の音で楽しむコンサート」

10月26日に、東京2020公認プログラムである杉並区のパラリンピック応援イベント「弦の音と足の音で楽しむコンサート」が杉並公会堂小ホールで開催。本イベントで、本学芸術学部アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域4年生と卒業生が参加し、授業課題「ヒーリング・アートプロジェクト演習」で制作した「見えない見えにくい子どもたちのためのさわる絵本」の展示を行いました。この絵本は、視覚障害のある子どもたちが



触って読むことができるように、さまざまな素材を使用して作られています。たくさんの方々に作品に触れて体験してもらえる機会となりました。

出展学生

板岡優里	芸術学部アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域 卒業
佐藤菜里花	芸術学部アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域 卒業
二瓶里菜子	芸術学部アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域 4年
駱 慧芳	芸術学部アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域 4年



22 | 杉並区小中一貫教育校「高円寺学園」の記念品制作

杉並キャンパスから近い、杉並区立高円寺中学校、杉並第四小学校、杉並第八小学校は2020年4月から統合され、義務教育9年間の小中一貫教育校「高円寺学園」として開校します。校舎の建て替え作業が進む中、“シンボル”的な存在の樹齢80年のクスノキの大木を、残念ながら伐採しなければならなくなりました。このクスノキをメモリアルとして未永く残そうと、短期大学部造形学科美術コースの林佐和子先生の協力を得て、新校舎で生徒が座って語る「時計塔のベンチ」として生まれ変わらせることができました。また林先生は、中学2年生の美術の授業で

「クスの葉ストラップ作り」のワークショップを行いました。時計塔を作る際に出た木材から1200枚ものクスの葉っぱの形にカットしたものを先行して120枚を磨き、同学科デザインコース教授の佐藤真澄先生がデザインされた「高円寺学園の校章」の焼き印を押し、ストラップを完成させました。心を込めて制作しながら、新たな命を吹き込み、このクスノキを大切にしてきた人々の想いを受け継ぐことで、お守りとなる、それぞれのシンボルが生まれました。このストラップは、新しく入学する生徒や地域の方々に記念品としてプレゼントされる予定です。

19 | 女子美術大学×彫刻の森美術館 キュレーターの“たまご”プロジェクト 彫刻党選挙2019開催

本学のインターンシップ活動の一つとして、神奈川県にある彫刻の森美術館とのコラボレーション企画が開催されました。学生たちは実際に美術館で開催されるワークショップやイベントの運営を体験し、その経験から野外美術館を舞台として実現可能なプログラムを考案。8月31日には、人気のある5つの彫刻作品から1つを来館者に投票してもらい、ナンバー1を決める企画「彫刻党選挙2019」を実施しました。学生自らキュレーションし、企画の立案から投票日当日の運営を行いました。選挙には総勢972票の投票が集まり、見事ナンバー1に輝いたのは、ニキ・ド・サンファールの「ミス・ブラック・パワー」。多くの来場者の方にご参加いただきました。



JAM

女子美術大学美術館コレクション展 作品と授業をつなぐ試み

6.26(水) - 8.3(土)

女子美術大学美術館のコレクションを、学芸員養成課程の学生が制作した鑑賞ツール等とともに展示しました。

第41回 造形「さがみ風っ子展」

10.25(金) - 11.2(土)

相模原市内小中学生の造形作品展を開催しました。

現代のコプト織 | 受け継ぐ技と心 ラムセス・ウィッサ・ワセフ・アートセンター・タビストリー

11.13(水) - 12.21(土) 女子美染織コレクションPart8「コプトの染織」と同時開催しました。

女子美ガレリアニケ

女子美術大学短期大学部1年前期基礎造形展

7.5(金) - 7.31(水)

短期大学部1年生が自由選択授業で制作した18講座の学生作品を展示しました。

第9回百年丹青縁展 中日国際交流書画展

9.17(火) - 10.4(金)

女子美術大学と上海交通大学教員による学術研究交流展を開催しました。

女子美スピリッツ2019 岡田節子展

10.11(金) - 11.1(金)

本学出身で名誉教授の洋画家 岡田節子(1917-2008)の作品を展示しました。

第12回 五大学合同写真展 ○展

11.8(金) - 11.22(金)

女子美術大学・東京工芸大学・長岡造形大学・多摩美術大学・中国伝媒大学の五つの大学でそれぞれ写真を学ぶ学生の写真展を紹介しました。

2019年度女子美術大学退職教員記念展

11.29(金) - 12.18(水)

2019年度に本学を定年退職されるアート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域講師の横山純子先生による展覧会を開催しました。

歴史資料展示室

佐藤志津没後100年記念展 佐藤志津と私立女子美術学校

3.8(金) - 7.15(月・祝)

本学初代校主・第二代校長の佐藤志津の生涯と功績を紹介しました。

JAM

2019年度 女子美術大学退職教員記念展

2020.1.8(水) - 1.28(火)

2019年度に本学を定年退職される芸術学部美術学科立体アート専攻教授の藤倉久美子先生による展覧会です。

2019年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

2020.3.8(日) - 3.12(木)

2019年度に本学大学院博士前期課程美術研究科を修了する学生が制作した作品の展覧会で、相模原キャンパス(女子美アートミュージアム)では、洋画、日本画、版画、工芸(染、刺繍、ガラス)、立体芸術、ヴィジュアルデザイン、プロダクトデザイン、環境デザインの領域を専攻した学生の作品を展示します。

女子美ガレリアニケ

AP(アートプロデュース表現領域)卒業・修了制作展

2020.1.17(金) - 1.28(火)

アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生・大学院生による卒業・修了制作の作品を紹介します。

2019年度女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

2020.3.8(日) - 3.12(木)

2019年度に大学院博士前期課程を修了するメディア、ヒーリング、アートプロデュース研究領域の学生作品を展示します。

歴史資料展示室

2019年度収蔵資料展 収蔵資料にみる女子美の歩み

9.15(日) - 2020.3.12(木)

収蔵資料により本学の歩みを紹介する平常展を開催します。

**2019.11.13(水) - 12.21(土)** 相模原 女子美アートミュージアム

女子美染織 コレクション展 Part8 コプトの染織

コプトとは、エジプトを起源とするキリスト教徒を指し、現在でも少数ながらコプト派キリスト教徒として生活しています。コプトの染織は、緻密な模様や美しい曲線のほとんどが織で表現されています。物語や信仰、動植物などの模様には、各時代の文化を取り入れた時代ごとに特徴を持っており、現代の視点からも幅広く表現の豊かさは特筆に値します。しかし、コプトの染織品は、海外での評価は高いものの、日本国内においては展覧会での一般公開のみに留まっており、当館でもその全体は広く公開されるものではありませんでした。本展では、多彩な女子美染織コレクションのコプトの染織品から初公開となる140点を選びすぐって展覧しました。エジプトの文化粹であるコプトの染織の魅力が再認識され、新たな創造を生み出す機会となりました。



女子美術大学広報誌

発行 学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 総務企画部広報グループ
監修担当 佐藤真澄・松山智一
デザイン協力 株式会社 Kitchen Sink.
印刷 株式会社ヒーローズ
発行日 2019年12月25日
© 2019 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方は、お送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ | TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL <http://www.joshibi.ac.jp>